

## 2 2 : ガレガ草地の造成法比較試験

畜産科学科 食料生産科学講座 堀川 洋  
 畜産フィールド科学センター 池滝 孝  
 別科 遠藤良平・松本五郎・水野穰治  
 メールアドレス horikawa@obihiro.ac.jp

### 研究の概要

【目的】これまでのガレガ草地造成の研究において、除草剤処理同日播種法が慣行播種法に比べて優れていることを明らかにした。この結果に基づいて、除草剤処理同日播種法によるガレガの単播、チモシー混播、エンバク同伴播種の違いが、ガレガ草地造成に及ぼす影響を検討した。

【方法】フィールド科学センター実験圃場 1.9ha を用いて、4月下旬の整地後から雑草の生育を放置し、6月7日に除草剤処理同日播種法による草種組合せの異なる3種類の播種処理を行った。播種量は、ガレガ;こまさと184、単播(G,3kg/10a),チモシー:キリタツプ、混播(G,2.5kg,Ti,0.8kg),エンバク;スワン、同伴播種(G,3kg,エンバク,5kg)であった。各播種処理区に1mx1mのコドラートをも5個設置し、植生調査は2週間ごとに行い、1番草は8月5日、2番草は10月21日に収穫した。

【結果】ガレガ個体数の推移は、雑草の発生量と密接な関係が見られた。播種から1番草刈り取りまでは、ガレガ単播区で雑草が優占したため個体数の減少が大きかったが、チモシー混播区およびエンバク同伴区では雑草が押さえられガレガ個体数の減少程度は小さかった。一方、1番草刈り取り後には、エンバク同伴区でエンバクの除去により雑草が繁茂したためガレガ個体数の大きな減少が見られた。単播区および混播区ではガレガ個体数の大きな減少はなかった。その結果、晩秋におけるガレガ個体数は、チモシー混播区で最も高く(50 個体/m<sup>2</sup>)、次いでガレガ単播区(40 個体/m<sup>2</sup>)、エンバク同伴区(35 個体/m<sup>2</sup>)であった。

各播種区の植生割合を乾物重で比較すると、1番草においてガレガの乾物重が最大であったのはチモシー混播区(全体の 20%)、次いで単播区(同6%)であった。エンバク同伴区の1番草では、エンバクの乾物収量は非常に高かったが(815g/m<sup>2</sup>)、ガレガの収量はごく僅かであった(1%)。2番草では、ガレガの収量はチモシー混播区で最も高く(全体の 48%)、単播区、エンバク同伴区の順であった。

以上の結果より、除草剤処理同日播種法によるガレガ・チモシー混播の造成法は、生育初期から良好なスタンドを形成し、牧草収量も確保できるので、優れたガレガ草地造成法であった。ガレガ単播とエンバク同伴播種による造成法の評価は、次年度の調査結果を待たなければならない。